

マスター・オブ・サンダー 決戦!! 封魔龍虎伝

2006(平成18)年7月18日鑑賞(ヘラルド試写室)

★★



監督・脚本・動作設計＝谷垣健治／出演＝倉田保昭／J.J Sonny Chiba（千葉真一、特別出演）／木下あゆ美／芳賀優里亜／椿隆之／永田杏奈／小松彩夏／アドゴニー・ロロ／平中功治／中村浩二／松村雄基（日活配給／2006年日本映画／92分）

……倉田保昭 VS 千葉真一という日本アクション界二大巨頭初の共演、という売り込みどおり、おじいさんパワーの炸裂は見事なもの。また、冒頭の6分間にわたる悪鬼と150名の弟子たちとの対決という、ワンシーンアクションもお見事！ しかし、本来の主人公であるその孫たち7名のアクションは、どこかマンガ的……？ あの若くカッコよかった志穂美悦子の、凛々しいアクションシーンの再現を期待していたのだが……？

最大の「売り」はアクション両巨頭の共演だが……？

この映画の最大の「売り」は、千葉真一と倉田保昭という日本アクション映画の両巨頭がはじめて共演し、はじめて本格的なアクション対決を披露すること。といっても、源流和尚を演ずる千葉真一こと J.J Sonny Chiba は1939年生まれだから、既に67歳のおじいさん……？

他方、三徳和尚を演ずる1946年生まれの倉田保昭は「アジアアクション界の英雄」とのことだが、残念ながら、私はそれすらも知らない有り様。パンフレットによると、彼は倉田アクションクラブを設立して多くのアクション界の後輩を育成しており、1970年生まれの谷垣健治監督もこの倉田アクションクラブの出身とのこと。

この映画は、その後、香港映画のアクション界で活躍してきたこの谷垣氏が、本格的な日本アクションを撮るために両巨頭を口説いて実現させた初監督作品だが……？

孫たちはなぜこんなに軟弱……？

千葉真一はかつて1970年にジャパン・アクション・クラブ（JAC）で真田広之や志穂美悦子など優秀な弟子たちを育てたはずだが、この映画では千葉も倉田も、その直接の弟子たちは登場せず、孫の世代ばかりが登場。その中心が源流和尚の孫のアユミ（木下あゆ美）。何でも彼女は『特捜戦隊デカレンジャー』のデカイエローで大ブレイクしたらしいが、さてそうなると、私にはサッパリついていくことができないもの。このアユミを含めてスクリーン上に登場する「青龍の七人衆」の7人の孫たちは、誰1人名前と顔が一致しないという寂しさ……。また、志穂美悦子のアクションは本当に鍛えられたもので、実にカッコよく決まっていたが、この孫たちの世代のアクションは半分ままと……。女の子はみんなかわいいから、まだ仕方ないかとそのマンガ的展開も許せるが、若い男にはつい「もっとシャキッとしろ」と言いたくなってしまいますが……。

冒頭のワンカットアクションはちょっと見モノ

映画の冒頭、回想シーンの後、「鬼封じの法」を執り行うために三徳和尚の弟子たち約150名が五重塔に向かう途中で展開されるのが、悪鬼（中村浩二）とのアクションシーン。このシーンは、途中監督からカットの声がかかることなく、悪鬼と150名との闘いを1つのシーンで連続して撮り続けること6分以上という、体力の限界ギリギリのシーンとして構成されており、これがこの映画の最初の見モノ……。

67歳 VS 60歳の対決も迫力満点……

この映画では、黄泉の国から人間界に現れてくる小野篁（松村雄基）はそれなりに格好をつければいだけでアクションシーンはないが、日本アクション界の両巨頭によるアクション対決が売りモノだから、後半のクライマックスは華々しく展開される「67歳 VS 60歳対決」となる。もっとも、ストーリー上はこの2人が直接対決する理由がないため、桔梗院を襲って三徳和尚を連れ去った小野篁が、三徳和尚の体の中に入り込んで源流和尚と対決するという構図に……。

この2人の対決は、「純日本風」に日本刀と棒術を中心としたものだが、さす

がに2人とも年齢を感じさせず迫力満点。もっとも、ラストに字幕とともに流れてくる撮影風景を観ていると、2人ともかなりしんどそう……？

時空を超えた闘いの根源は……？

タイトルの『封魔龍虎伝』から推測できるとおり、この映画の一方の主人公は黄泉の国にいるはずの小野篁。彼は平安時代の貴族だが、妹との道ならぬ恋に狂って死んでしまったため、現世への恨みを持った怨霊となり、今や人間界を支配しようとしていた。他方、五重塔にある黄泉の国への出入り口を守り、黄泉の国から来る怨霊＝鬼を封じるのが桔梗院の役目で、そこにはかつて三徳和尚と源流和尚を含む「青龍の七人衆」がいた。しかし、40年後の今、桔梗院を守るのは三徳和尚一人。そして、戌年の今年は12年に一度の「鬼封じの法」を行う年……。そんな三徳和尚の動きを、源流和尚は手助けしてくれるのか……。そして、小野篁と桔梗院を守る三徳和尚との間の平安時代から現代までの1400年の「時空を超えた闘い」の行方は……？

ヘンな外国人は不要……？

パンフレットには、「日本アクション映画活性化計画作品第一弾、ここに誕生!!」とある。谷垣監督の意気込みもきつとそうなのだろう。だとすると、ストーリー構成上何の必要もない、ヘンな外国人アポロ（アドゴニー・ロロ）を登場させる必要はなく、かえってマイナスでは……。それでなくても、孫たちの顔と名前が一致しないうえ、ヘンにお笑いを誘うようなギャグをストーリー上点在させるのは、私には「アホバカバラエティー」番組を見馴れている若い観客への過度なサービスとしか思えない。かわいい女の子たちの幼稚なアクションにさえも振り回される役柄が必要だとしてセットしているのだろうが、そんな姑息なことをせず、やはりかわいい女の子たちにもっと本格的なアクションを教えるべき。ちなみに、「太もも美人」と謳われた、『あずみ』（03年）、『あずみ2 Death or Love』（05年）における上戸彩のアクションはすごくカッコよかったもの。やはりあれくらい真剣にやらせなければ、あれだけ一生懸命頑張っている2人の御大（おじいさん）に失礼なのでは……。 2006(平成18)年7月19日記